

編者の福井勉教授の人脈と眼力で集めた、運動器の理学療法のエキスパートが書いた本。これだけで新人理学療法士だけでなく、私のような昭和の理学療法士にとっても必読の本であることは間違いない。

腰痛や股関節、膝関節痛など、運動器疼痛症候群は明らかな外傷や、腫瘍、感染症などレッドフラッグを除けばその人の長年の姿勢や生活習慣、職業、スポーツなどにより特定の組織に物理的ストレスが、繰り返したまたは持続的にかかることによる累積加重型損傷が多い。何らかの機能破綻による特定の組織に対する物理的ストレスの蓄積が痛みの原因となり、ついには構造破綻を起こす。痛みのある部位を治療し患者の訴えが一時的に改善したとしても、原因となっている機能破綻（異常姿勢アライメントや異常な運動パターン）を改善しなければまた再発を起こす。再発を防ぐためには痛みの原因となる機能破綻に対する運動療法が必要であり、理学療法士の専門性が発揮されるところである。

しかし、患者によって異なる機能破綻を評価により特定することはかなり知識が必要になる。MMTやROMテストなどの量的な評価ではこの機能破綻をみつめることはできない。姿勢アライメントや運動の質を評価することが必要であり、その方法が本書では代表的な症候に対して記載されている。

本書の構成は1, 2章が「股関節・骨盤」、3章「上肢」、4, 5章「肩関節・胸椎」、6, 7章「膝関節」、8章「骨盤底筋」、9章「足部」、10, 11章は「体幹、

腰椎」の機能破綻についてと、ほぼ全身の問題について網羅されている。そしてそれぞれについて、(1) 症候、(2) 機能解剖、(3) 機能破綻と構造破綻の関係性、(4) どう評価するか、(5) どう治療するかという項目について簡潔に書かれている。1章ごとに完結しているので臨床の場でも短時間で読むことができる。まずは全体を一読し、次に臨床で困ったときに該当する章を読み参考にするとうい。

新人理学療法士はもちろん経験のある理学療法士にとってもルーチンワーク化した治療を見直すためのよい教材になることは間違いない。おそらく今まで気が付かなかった新しい視点を多く発見することができる。評価、治療はWeb動画もついているので実際のイメージもつかみやすい。

運動療法は身体に障害がある者に対して医行為として行われる、理学療法士の専門分野である。医学的な根拠に基づいて行われなければならないし、医学の進歩とともに運動療法も変化していかなければならない。しかし、現場では関節可動域運動やストレッチ、筋力テストの肢位での徒手抵抗運動による古典的筋力強化法がまだまだ主流のように感じられる。もちろん基本は大切にしなければならないが、本書を参考に多くの理学療法士が機能破綻の治療という視点で現場を変えていくことができれば、出版を企画した福井教授の思いが叶うことであろう。(B5・頁184 2019年 定価：本体3,500円＋税 [ISBN978-4-260-03835-5] 医学書院刊)